

《論文》

「ヒバクシャ」の言葉の源流をたずねて

—1977年NGO「被爆の実相とその後遺・被爆者の実情に関する国際シンポジウム」にみる

竹 峰 誠一郎

私たちはいま、「被爆の実相とその後遺・被爆者の実情に関する国際シンポジウム」長崎ラリーに集まっている。

私たちは知った。

あの日に起きたことが単なる破壊でなく、人間が人間でなくなった日であったことを。

私たちは知った。

原爆がもたらした、いのち、くらし、こころのすべてにわたる傷あとの深さと、それが時の経過のなかでやわらぐことなく、拡大しつづけていることを。

それだけではない。私たちは知った。

原爆の苦しみをのりこえて生きぬこうとするひとびとがあることを。

被爆者はいう。「この目で核兵器が世界からなくなるのを見とどけないかぎり死んでも死にきれない」と。

被爆体験の風化が叫ばれて幾年かがすぎた。「被爆したものでないとわからない」という被爆者のつぶやき……。

しかし、シンポジウム宣言はいう。

私たちはすべてヒバクシャなのだ、と。

私たちが原爆の人間の悲惨を知り、理解しようとする想像力をもつなら、そのミゾをうずめていくことができるのだ。

被爆者の原爆とのたたかい、それは被爆者の人間回復のたたかいである。

そして、私たちは知らなければならない。

被爆者援護、それはひとり被爆者のみならず、私たちすべての平和な未来を保証するものだということを。

今こそ私たちは、このシンポジウムの成果を、被爆者の声を全世界に広め、国連軍縮特別総会をめぐして、核兵器禁止の世論をまきおこそう。

そして、声を大にして、よびかけよう。

ノーモア・ヒロシマ

ノーモア・ナガサキ

ノーモア・ヒバクシャ

1977年8月8日 長崎

はじめに：被爆者問題国際シンポで生み出された「ヒバクシャ」

1977年7月21日から8月8日にかけて、東京、広島、長崎でNGO主催「被爆の実相とその後遺・被爆者の実情に関する国際シンポジウム」（以下、被爆者問題国際シンポ¹⁾）が開催された。冒頭で紹介したまるで詩のような文書は、3週間にわたる国際シンポの最後をかざる長崎ラリーで採択された「長崎より世界の人びとへ」である。被爆者問題国際シンポの成果が、実に明白に要点を押さえて反映されている。

同国際シンポは、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）が、原爆被害と被爆者の実情を調査し、核兵器即時廃絶への国際世論喚起などを国連に要請したことが発端であった（日本原水爆被害者団体協議会 2009:160）。国連が主催して開催することは困難とされたが、国連は国連経済社会理事会と協議資格を持つ国連NGOに原爆被害の調査研究を委嘱した。国連NGOの一つである、スイスに本部を置く国際平和ビューロー（IPB）が中心となり、NGO軍縮特別委員会で支持決議をあげ、「原爆の影響で苦しんでいる人びとの継続する諸問題を研究するために、医学、社会学、その他の関係分野における国際的に承認された専門家の会議」を構想し、40に及ぶ国際NGOの支持をとりつけた。

これらの動きのなかで、日本被団協の代表委員をはじめ各界78氏が支持を呼び掛け、日本準備委員会が立ち上がった（ISDA 1978:361-363）。開催地の広島と長崎にもそれぞれ準備委員会が発足した（ISDA 1978:365-369）。当時鋭く対立していた原水爆禁止日本協議会（原水協）と原水爆禁止日本国民会議（原水禁）の両関係者が共に個人の資格ながら準備委員会に名を連ね、「核兵器禁止運動の統一機運に対する歓迎」（ISDA 1978:6）が広がるなかで同シンポは開

催された。各都道府県には同シンポの推進委員会が設立された（ISDA 1978:372-376）。

さらに国際NGOと協働し、世界保健機構（WHO）や国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）の協力も得て、「被爆者問題国際シンポ」はNGOの主催という形で開催された（ISDA 1978:6-10）。NGOという言葉が日本ではまだ一般的ではない時代に、しかも国家権力が幅を利かせる核兵器という安全保障分野で、NGOが国境を越えて協働し被爆者問題国際シンポが開催された。同シンポはNGOがもつ可能性を拓く先駆的な事例の一つだと言えよう。

「これまで核問題をめぐっていくつかの国際あるいは国内の会議が行われてきたが、被爆者問題に直接に真正面から取り組んだものはなかったと言ってもよいだろう。被爆者の実情がとり上げられた場合でも、被爆者問題は核兵器をめぐる諸問題の単なる一部分として形式的にあつかわれているにすぎず、そうした中で広島・長崎の原爆投下から32年目にして開催された同国際シンポは、「その名称が示す通り、被爆者問題を主題とした初めての国際会議である」（浜谷 1977:317-318）と、社会学者の浜谷正晴は高く評価する。1956年第2回原水爆禁止世界大会で「原水爆被害に関する科学者の国際会議開催を要請する決議」がなされているが、21年を経てついに実現したとも言える。被爆者問題国際シンポは「被爆者問題を考える際の画期」であり、「被爆50年、60年においてもこれを越えるものは出ていない」（舟橋 2006）と舟橋喜恵（広島大学名誉教授）は指摘する。

3週間にわたった被爆者問題国際シンポは、次の三つの段階にわけて開催された（ISDA 1978:19-25、390）。第一に、7月21日から30日にかけて東京・広島・長崎で国際専門家調査団による会合が開催された。日本側専門家が作成した調査報告書をもとに討議がなされ、広島・

長崎の現地調査も実施された。同調査団は13か国19名の科学者に、25名の日本側専門家を加えた合計44名で編成された。同調査団の会合を経て、第二に、7月31日から8月2日にかけて広島で、NGO代表らを交えたシンポジウムが開催され、海外からノーベル賞受賞者3名を含め約60人、国内からは300人が集まり、分科会も開催され討議が深められた。そのシンポの成果を国内外に広める第一歩として、第三に、8月5日広島で7000名、また8月8日には長崎で3000名を集めてラリーと名付けられた集會が開催された。

「私自身長く原爆問題にたずさわって来たが、かくも広範な被爆者問題、原爆問題に関係した学者が一堂に会した例を今まで見たことがない。学者だけではない。被爆者、平和運動にたずさわる人たち、その階層、思想もきわめて多様であった」（伊東 1977a）と、同シンポの運営委員の一人である伊東壯（山梨大学・当時）は述べる。伊東は広島で被爆し、当時日本被団協の事務局長を務めていた。社会学の分野では石田忠（一橋大学・当時）を中心に、田沼肇（法政大学・当時）、浜谷正春（一橋大学・当時）、湯崎稔（広島大学・当時）らが国際シンポに積極的に関与した。職業研究者だけがあつまる学会とは異なり、当事者である広島・長崎の原爆被害者が参加し、かつ原水爆禁止運動関係者らと共に議論を深めていったことも同シンポの特色であった。

同シンポは翌1978年5月末に国連で開催される軍縮特別総会の礎を築くものでもあった。広島・長崎の原爆被害とは何か、そのなかで被害者はどう生きてきたのか、人々の姿を具体的に浮き彫りにすることを通じて、「軍縮に人間の顔を与え」（ISDA 1978:381）、「軍縮の主要な障害のひとつとなっている無関心さと誤解を打開しようとする試み」（ISDA 1978:59）であっ

た。シンポの参加者には、米ソ冷戦下の「核戦略体系のとめどもない増強と新型核兵器の出現に対する危機感」（ISDA 1978:7）が広く共有されていた。

被爆者にとっても同シンポは格別意味を持つものであった。「原水爆禁止運動が始まり、かなりの人が被爆者に接してくれました。しかし、そのほとんどの人たちが『お気の毒な人たち』としか受け取ってくれませんでした。……原水禁組織の分裂以降、その距離はますます開き、苦しさをわかってほしいという望みは、次第にあきらめになり、被爆者の多くは貝のようにおし黙ってしまうほかはなかったのです。……しかし、被爆者たちも年老いてきました。……苦悩に苦悩の連続であったこの被爆体験をせめて意義あるものにしたい、……この気持ちを世界の人に知らせるのが、……今回の国際シンポジウムです」（行宗 1977）と、当時日本被団協代表委員であった行宗一は、シンポの意義を述べている。また、被爆者運動にとっては、被爆者援護法制定に向けた骨子を発表したのが、与党のみならず、野党側の動きもはかばかしくないなかで、「被爆問題を国民のものとする、同時に国際化することが、遠くとも一つの道である……。シンポジウムは、被爆者側には、そうしたねらいをもったものであった。同時に当然のことながら、分裂した国内原水禁運動の統一をも願っていた」（東京都原爆被害者団体協議会 1988:62）と、伊東壯は回想する。

同シンポは今なお、被爆者のことを研究するうえで押さえておく基本事柄だと思われる。ヒロシマ戦後史のなかで、被爆者問題国際シンポは「被爆体験の国内外への普及という点で大きな画期となった」（宇吹 2014:282）と宇吹暁は指摘する。だが2015年、被爆70年を迎え関連書の刊行も相次いだ。同シンポは埋もれていた観は否めない²。そうしたなか、被爆者問題国

際シンポに改めて本稿は光を当てるものである。

被爆者問題国際シンポは論点となりうる点は多岐に及ぶが、本稿では、同シンポで生み出された「ヒバクシャ」（以下、ヒバクシャ）の言葉にしぼって論じていく。「われらみなヒバクシャ」（“All of Us Are Hibakusha”）と題し、同シンポの国際準備委員会議長を務めたIPBのアーサー・ブースは高らかに演説した（ISDA 1978:29; Editorial Committee, Japan National Preparatory Committee for ISDA 1978:11）。そして「ヒロシマ・ナガサキのヒバクシャから全世界のヒバクシャにうったえる」（“A Call from the Hibakusha of Hiroshima and Nagasaki to the Hibakusha of the World”）と、シンポジウムの宣言「生か忘却か」が発表され、「私たちはみんなヒロシマ・ナガサキの生き残りです。私たちもまた、ヒバクシャ」と宣言された（ISDA 1978:2-5）。

なぜヒバクシャとのカタカナの表記が同シンポで生み出されたのであろうか。ヒバクシャあるいは Hibakusha との表記は、被爆者問題国際シンポジウムにつながる決議や参加を呼びかける招請状（ISDA 1978:379-382）では用いられておらず、まさに国際シンポの討議の深まりのなかで生み出された言葉である。

ヒバクシャとのカタカナ表記が生み出された背景とそこにある思想に本稿は迫っていく。具体的には同シンポの報告書や参加者が当時執筆した論稿などの文献資料などをもとに、次の三つの角度から迫っていく。第一に「ヒロシマ・ナガサキのヒバクシャ」の意味を掘り下げる。ヒロシマ・ナガサキの被爆者ではなく、ヒロシマ・ナガサキのヒバクシャとされたのはなぜなのであろうか。第二に「われらみなヒバクシャ」「私たちもまた、ヒバクシャ」とは何を意味するのであろうか。広島、長崎の原爆被害者ではないものが、なぜにヒバクシャとなりうるのか

を探究していく。そして第三に「われらみなヒバクシャ」と宣言したが、埋没したものはないのか、「われらみなヒバクシャ」の周縁に置かれたものを検討する。

被爆者問題国際シンポで生み出されたヒバクシャの言葉に着目し論じることを通じて、ヒバクシャの言葉³の源流を見つめ、筆者が提唱するグローバルヒバクシャ論⁴と架橋し、ヒバクシャ論⁵あるいは被爆者論⁶を築く礎とすることが本稿のねらいである。

1. ヒロシマ・ナガサキの「ヒバクシャ」

被爆者問題国際シンポにむけて日本準備委員会は、原爆被害者の全国調査に取り組んだ。一般調査、生活史調査、医学調査と3つの領域にまたがる包括的調査であった。調査された被爆者の数は第一次集計段階で7741名にのほり、日本に在住する56名の外国人被爆者もそこには含まれており、調査対象者は最終的に9000人余に達したとみられる（ISDA 1978:219）。

被爆者調査は41都道府県で実施され、調査員はあわせて4000人に及んだ。被爆の実相と後遺の調査は、調査員の献身的な努力と、被爆者の積極的な協力が重なり進められた。「シンポジウムと被爆者、シンポジウムと被爆していない者、被爆した者と被爆していない者をつなぐ太いきずな、それは被爆者調査によって結ばれ」、「調査は調査する者を大きく変えた」（浜谷 1978:150, 152）と、被爆者調査の輪の中にいた社会学者の浜谷正晴は指摘する。

被爆者調査は「その立案と実施にさいして、専門家とともに、被爆者が中心的な役割を果たした。……被爆者が調査の対象となるにとどまらず、みずから調査員として調査活動に参加した」（ISDA 1978:217）と田沼肇はシンポで報告した。沈黙を続けた被爆者はもちろんいたが、堅く口を閉ざしていた多くの被爆者が同調

査に応じた。さらに自ら調査の推進役になり、各地の推進委員会結成の中心にたち、自分たちが直面している問題を積極的に提起し、具体的な回答を専門家に迫るなど、主導的な役割を果たした被爆者団体や被爆者の姿が各地にみられた。被爆者調査は調査対象である被爆者自身も変え、「被爆者運動にとっても、大きな前進のきっかけをつくった」（日本原水爆被害者団体協議会 2009:162）と日本被団協50年史に記されている。

被爆者調査は、社会学者も加わり、社会科学の観点からの考察も行われた。調査の方法論として、被爆問題は一時的ではなく、被爆前、被爆時、その後、現在という歴史的变化のなかでとらえ、かつ一断面ではなく、いのち、くらし、こころの領域を全体的にとらえかつ連関させていく必要性が述べられた（ISDA 1978:44, 125）。また、「原爆がもつ物理的威力は、(a)熱線、(b)爆風、(c)放射能であり、一般的にはとくに放射線が原爆の特殊性であるといわれてきた。しかし、この問題を社会科学の面から考えると、……政治的・社会的現象としてとらえ」（ISDA 1978:126）ていくことが重要であると指摘された。

「それぞれが調査以前にもっていた被爆者像や被爆者問題像が、調査によって打ち砕かれ、問題意識を新たなに深化させ」（浜谷 1978:152）ながら被爆者調査は進められた。そして同調査をもとに日本の専門家がまとめた「原爆と人間」をはじめ「原爆による物理的破壊と死亡者数」「原爆の医学的影響」などの報告書は、国際調査団と議論を進める土台とされ、「興奮と達成感をよびおこした」（ISDA 1978:58）。

「多くの人びとが広島で長崎でおこった瞬間的な死と破壊について知っていること、また多くの人びとがきのこ型の雲の写真を見たことがあることは、すでにわかっていた。しかし、32

年たったいま、身体のみだけでなく、社会的、心理的にもいまだに苦しんでいる35万以上ものヒバクシャのことについては十分知られていない」状況であったからである。「原爆によって生じた被害は、たんに戦争直後の数年にかぎられず、時間がたつにつれて、実際に継続し、かつ拡大してきた」（ISDA 1978:59）との認識が参加した海外の専門家とも共有された。

また原爆投下に伴う死亡者数が1967年ウ・タント国連事務総長報告と比べはるかに多いことが判明した。国連報告では広島は78,000人、長崎は27,000人が原爆で亡くなったとされていた。しかし、被爆者問題国際シンポでは、1945年12月末までに、広島で約14万（誤差±1万人）、長崎で約7万人（誤差±1万人）が死亡したと推定された（ISDA 1978:106, 107）。残留放射能については、誘導放射能と放射性降下物のいずれにおいても、その影響が国連報告では無視されてきたことも浮き彫りになった（ISDA 1978:107）。

被爆者問題国際シンポを経て、被爆者の身に起こってきた被害像は塗り替えられ、そして世界にむけて発信されたのである。「被爆者がおかれてきた社会的・心理的生活の実態が、初めて体系的に海外の人びとに認識された」（ISDA 1978:83）と同シンポの運営委員であった庄野直美（広島大学・当時）は指摘する。そのうえで、庄野は「『ヒバクシャ—HIBAKUSHA』を国際用語とする主張は、このような認識のうえに立って、核兵器廃絶をめざす決意を込めて生まれた」（ISDA 1978:83）と述べる。

「『ヒバクシャ』ということばは国際的に用いられるべきであり、全世界的に認識されるべきである」（ISDA 1978:80）と同シンポの終了後に発表されたプレスリリースで述べられている。その後、同シンポの報告書の英語版が *A Call from Hibakusha of Hiroshima and*

Nagasaki と題して発刊された。Hibakusha という用語が翻訳されずにそのまま用いられた。同英語版の報告書のチラシには“‘Hibakusha’ is the Japanese word for ‘A-bomb sufferer’, which the symposium decided should be brought into international use”（「ヒバクシャ」とは原爆被害者を示す日本語であり、国際的に用いていくことが、同シンポで決められた。）とその理由が説明されている。被爆者は Victims, Sufferers, Survivors 等ではなく、Hibakusha との呼称を用いることになり、それを世界に通用する言葉にしていくことが、被爆者問題国際シンポで確認されたのである。

シンポの中で Hibakusha を国際用語としていくことを言い出したのは、広島に暮らした経歴を持ち、同シンポで海外専門家の助言者を務めていた、アメリカのバーバラ・レイノルズ（ウィルミントン大学・当時）であったが、「シンポジウムが終わるころには『ヒバクシャ』は完全に市民権を獲得した」（伊東 1977a）と伊東社は指摘する。

同シンポジウムで登場したヒバクシャは、Hibakusha を国際用語にしていく文脈の中で生み出されたものである。広島・長崎の原爆被害者問題が国際的な問題と認識される契機に同シンポはなった。そして広島・長崎の原爆被害者が国際的な存在となった証として、被爆者ではなくヒバクシャと表記されたのである。

被爆者調査は顔をもった個から出発し、原爆体験を積み上げて、ヒバクシャ像を築きあげてきた。被爆の実態調査のなかでは、「挫折感におちいり、無気力・無関心な自閉症的性格を強めている被爆者も少なくない」が、他方で「被爆者たちは、主体的に被爆体験を思想化し、『核兵器のない世界の建設者』と自己規定」（ISDA 1978:154）してきた一面も浮き彫りにされた。

「ヒバクシャは単なる被害者ではなく核時代

に生きる人類にとって新しい価値を創造する者の意味をふくむ」（伊東 1977a）と、伊東社は指摘する。そうしたヒバクシャ像は国際調査団員とも共有され「ヒバクシャとは、ただひどい目にあった者としてとらえるのではなく、なおかつ人間の尊厳を主張してたたかう者です」（浜谷 1978:153）と、国際調査団の一員であるアレクサンドル・カリアディン（ソ連科学アカデミー（当時））は発言した。「ヒバクシャは原爆投下およびその結果の証人として、全面完全軍縮をめざし、軍拡競争に反対する世界の運動に、きわめて重要な貢献をしている」（ISDA 1978:80）と同シンポのプレスリリースでも述べられている。

被差別の対象とされたり、社会的弱者として泣き寝入りをしたり、沈黙したりする側面だけでは、被爆者問題国際シンポで登場したヒバクシャは十分にとらえることはできないのである。

2. 「われらみなヒバクシャ」

同シンポのなかで晩さん会が広島で開催された。「そこには多くの学者、被爆者、諸団体の代表が集まっていた。三人のノーベル賞受賞者をふくめて学者の数は、ゆうに二百人を超えていたであろう。……中でも一番はしゃいでいたのは、全国から集まった被爆者たちだった」（伊東 1977b:57）。宴の最中、同シンポの国際準備委員会の議長を務めていたアーサー・ブースがマイクの前に立ってぼつりと語った。「“We are all Hibakusha. Survivors of Hiroshima and Nagasaki”（我々はみんなヒバクシャです。広島・長崎の生き残りです）。誰も心が一つであった。国をこえ、主義主張をこえ、被爆した事実すらをのりこえて」（伊東 1977b:57）、ヒバクシャとしてまとまっていたことを伊東社は追想する。

アーサー・ブースは「われらみなヒバクシ

ヤ」(“All of Us Are Hibakusha”)と題した演説をシンポで行い、「どこの国からこようと、私たちはすべてヒバクシャ」(ISDA 1978:29)であると高らかに述べた。シンポジウムの宣言では「私たちはみんなヒロシマ・ナガサキの生きのこりです。私たちもまた、ヒバクシャです(We also are Hibakusha)」とうたわれた。広島・長崎の原爆被害者だけでなく、なぜに、われらはみなヒバクシャなのであろうか。

被爆者国際シンポにむけて、作業文書Ⅰ「原爆による物理的破壊と死亡者数」、作業文書Ⅱ「原爆の医学的影響」、作業文書Ⅲ「原爆と人間」、作業文書Ⅳ「平和教育とマスメディア」の調査報告書が日本側研究者で準備され、国際調査の土台となった。また同作業文書とあわせて自然科学部門の補足資料として、「核兵器と地球環境の放射能汚染」が、同シンポの日本準備委員会代表幹事の三宅康雄、猿橋勝子らの気象研究所の所員によって提出された(ISDA 1978:185-212)。

「核実験による死の灰の汚染が地球的規模ですすんでいること、地球上のすべての人の体の中にこの死の灰が取り込まれていることをはじめてくわしく知った海外の専門家は、この報告書の重要性を逆に私どもに力説しました」(猿橋ほか 1977:36)と執筆者の猿橋は回想する。「私どもの論文は広島、長崎の被爆とは直接には関係がないので、関連資料として提出したのですが、とくに海外の方から強い要望があり、本報告書の第五章として入ることに決定しました」(猿橋ほか 1977:37)と猿橋が語るように、「核兵器と地球環境の放射能汚染」は作業文書Ⅴに格上げされてシンポの議論の一つの土台となった。

「われらみなヒバクシャ」あるいは「私たちもまた、ヒバクシャ」とは、地球規模の放射能汚染の広がりを自覚して生み出された言葉なの

である。「私たちは爆風とやけどを体験こそしていませんでしたが、みんな体内に人工放射能をかかえています」とシンポの宣言では述べられている。

しかし放射線被曝をしたという事実をなぞるだけでは「ヒバクシャ」という言葉は十分とらえることはできない。なぜなら、「われらみなヒバクシャ」あるいは「私たちもまた、ヒバクシャ」とは、広島・長崎の被爆者の問題を、自分の問題として引き付ける磁場となる言葉でもあるからである。以下に二つの観点から説明したい。

まず1945年8月6日、9日の原爆は誰に落とされたのかということである。「原爆は日本人あるいは広島・長崎の市民にのみ投下されたのではなく、すべての人間と『いのちあるすべてのもの』に投下された」(浜谷 1977:133)のであり、その意味で、宣言にあるように「私たちはみんなヒロシマ・ナガサキの生き残りです。私たちもまた、ヒバクシャ」であると、浜谷正晴は説く。広島・長崎の原爆を人類に対する攻撃として、一人ひとりの身に引き付けた先に「われらみなヒバクシャ」の言葉は生まれたのである⁷。

もう一つは現代の核時代をどう認識するのかということである。「原爆には生き残りでしたが、今なお、ヒロシマ・ナガサキを壊滅した原爆よりずっと強力な数百万発の原水爆……の配備が、私たちをおびやかしています」とシンポの宣言は指摘する。「私たちは将来、核兵器の犠牲者となる可能性がある」と確実に言えるでしょう。私たちはすべてヒバクシャであると思ってよいでしょう。……この世界で、おなじ危険を共有しているのですから」(長崎証言の会 1980: 18)と、社会学者のヒルダ・チェン・アピュイ(コスタリカ大学・当時)は指摘する。「核戦争の危険のもとに生きねばならぬ「未来

の犠牲者になるかもしれない人類』(ISDA 1978:159)として、潜在的な被爆者であるとの自覚が「われらみなヒバクシャ」の言葉の源にはある。

「われらみなヒバクシャ」とは、さらに被爆者である体験者と非体験者、そして私たち一人ひとりを相互に結び、核時代に批判的に向き合う協働のアリーナを築く言葉でもある。被爆者問題国際シンポを一つの原点に広島原爆被害者相談員の会は活動し、『ヒバクシャ——ともに生きる』と題した機関紙を毎年刊行している。原爆被害者の方とともに生きる証として「ヒバクシャ」という言葉を原爆被害者相談委員の会是用いる⁶。

被爆者と調査者が「援護する者と援護される者」というような一方的な関係にあるのではなく、被爆者になう課題がわれわれ自身の課題でもある(浜谷 1977:133)という共通の土俵を作り上げるうえでも、「私たちはすべてヒバクシャ」とあるとのシンポの宣言は重要な意味を持つと、浜谷正晴は説く。

「ヒバクシャであるということは、ただ単に人口放射能におかされているだけでなく、そのことの意味するもの一切を知覚し、全人類をこれ以上いかなる被害からも救うために献身することをいう(長崎証言の会 1980:16)との広島原田東岷医師の言葉を引用し、「私たちは日々ヒバクシャとして生きる」(長崎証言の会 1980:17)ことをバーバラ・レイノルズは説く。「私たちは自らヒバクシャとして共同せねばなりません。ヒバクシャ同志としてたがいに助けあわねばなりません」(長崎証言の会 1980:17)と連携し合う必要性もバーバラ・レイノルズは説く。「ヒバクシャ」になっていくことが大切なのである。

被爆者問題国際シンポは、非被爆者もヒバクシャになり、ヒバクシャとして相互につながり

あい、「われら、みなヒバクシャ」になっていく、まさにそうした場であった。国際調査団が長崎に入った夜の晩さん会で、米国でマンハッタ計画に携わった経歴を持つジョセフ・ロートブラットが、「私は原爆製造の計画に参加しました」と話し始め、その眼には涙がいっぱいたまっていたことを、伊東壮は回想する。そして、「過去の加害者とさえ『ヒロシマ・ナガサキをくりかえさせぬ』決意の中では一つの思いが通い合った。こうした共通の『心』は『我々はみんなヒバクシャだ。我々はみんな広島・長崎の生き残りなのだ』……の言葉に最も端的に示された」(伊東 1977a)と伊東は指摘する。北朝鮮系と韓国系の両組織の代表が朝鮮半島の分断を超え共に議論を深める光景も同シンポでは見られた。また、先にも述べたように、同シンポは、原水爆禁止運動の統一を促進するものともなった。

3. 「われらみなヒバクシャ」の視野の外にあったもの

同シンポで広島準備委員会の副会長を務めた今堀誠二(広島大学・当時)は、シンポの宣言を受け、「広島・長崎を原点に連帯の輪を広げよう 人類はすべてヒバクシャ」と題して読売新聞に寄稿した(今堀 1977)。国際シンポは成功裏に終わったとの認識を今堀は示しつつも、核兵器廃絶に向かっては「国際政治の難関」があり、その点でシンポは詰めが甘く、「世界のヒバクシャ団結せよ」だけで乗り切れるのかと疑問を呈した。長崎で被爆した詩人の山田かんも「われらみなヒバクシャ」は、「再びヒバクシャを作り出す危機が世界に満ち充ちている状況から、これを阻止すべくNGOにおいてとりあげられたスローガン」として一定の理解を示しつつ、「核軍力によって各国間の力の政策を押し進めている一握りの人間……の危険なありよ

うはこの短いことばからはこぼれ落ちている」。「人類のなかには、最初からヒバクシャであることから逃れうる者たちがいる。核権力の当事者たちである」（長崎証言の会 1980:29）と指摘する。人類みなヒバクシャとすると、加害者である核権力の存在が後景に置かれることを、今堀と山田の二人は指摘するものである。

埋没するのは加害者の存在だけではない。「われらみなヒバクシャ」あるいは「私たちもまた、ヒバクシャ」とシンポは打ち出したが、同シンポは「広島・長崎の被爆の実相とその後遺と被爆者の実情が主題」（ISDA 1978:31）とされ、広島・長崎以外の核被害者は視野の外に置かれていた。

被爆者問題国際シンポに向けて作業文書Vに格上げされた「核兵器と地球環境の放射能汚染」の補遺として「ビキニ核兵器実験とその影響」（ISDA 1978:213-214）が服部学（立教大学・当時）によって用意され、第五福竜丸の乗組員やマーシャル諸島住民にも被害が及んだことが若干言及されている。しかし同文書は「詳細な討論時間の余裕はなかった」（ISDA 1978:84）。広島、長崎の原爆以外にも核被害者が生み出されている現実がシンポのなかで掘り下げられたり、広島、長崎との比較検討がなされたりした形跡はない。

被爆者問題国際シンポで打ち出されたヒバクシャは、世界の核被害者を照らす言葉ではなかったのである。米核実験場とされたマーシャル諸島の人びとは1971年以降、原水禁大会やビキニデー集会で自らの核被害を訴えに来日することもあったが、広島、長崎の原爆被害者とは同列ではなく切り離されていた。同シンポでビキニの名は象徴として語られても、そこに暮らす現地の人間に焦点があてられることはなかったのである。同シンポの根幹をなす作業文書には日本を指して「世界唯一の被爆国政府」（ISDA

1978:157）との表現も見られる。

原水禁は1971年以降「反原発」を中心スローガンに掲げるようになり、全国各地、さらに欧米の反原発運動にかかわる人が原水禁運動に参加するようになっていた（原水爆禁止日本国民会議 2002:170）。しかし「NGOの被爆の実相とその後遺の国際シンポジウムは、核兵器と原発を二元化し、核兵器の廃絶をとこなえても、原発問題を頑固に除いたことは、非現実的で全く半面的なものでしかなかった」（長崎証言の会 1980:23）と、広島に被爆者で詩人である栗原貞子は指摘した。栗原はシンポの広島準備委員会専門委員であったが、原発が視野の外に置かれたことを批判した。

一方栗原は、「広島、長崎、ビキニを体験せず、そこで何が行われてきたかさえ知らない人たちまで均質のヒバクシャとして、一括りにし“みなヒバクシャ”と呼ぶことは、広島、長崎、ビキニの体験をうすめさせ、核時代の原体験を消失させるものではないでしょうか」（長崎証言の会 1980:23）とも述べ疑問を呈した。「われらみなヒバクシャ」は、「笹川親分の世界はひとつ、人類はみな兄弟を思わせる」（長崎証言の会 1980:23）実態を伴わない抽象的な概念のように栗原の目には映ったのである。

それに対し、「われらみなヒバクシャ」という状況認識は、もう一度広島・長崎の原点に人びとを立ち返らせ、「身近でない」核兵器の現状に危機感を持って目を向けるものであると、同シンポの日本準備委員会の幹事であった小川岩雄（立教大学・当時）は主張した（長崎証言の会 1980:27）。小川は「現在の原発反対論者や市民運動の指導者の一部に見られる核兵器問題のことさらな（または迂闊な）軽視、ないしは認識不足」があり、「核軍備競争の現段階の重要性についての言及が忘れ」（長崎証言の会 1980:27）られる傾向にあることを指摘する。

そして「核戦略体制や核の傘といった『身近ではない』問題は大衆を引き付けられないという戦術的発想にでも由来するのだろうか。それとも原発は否定しても自国の核戦力は肯定するアメリカなどの一部の活動家の所論に専ら追随しているのだろうか」(長崎証言の会 1980:27)と疑問を投げかけた。

被爆者問題国際シンポは、核兵器の脅威を背景に広島・長崎の原爆被害者と非体験者の新たな関係を築き、ヒバクシャを打ち出した。他方、原発の脅威を背景に「被爆者と被曝者を統一的に扱えたのがヒバクシャではないでしょうか」(長崎証言の会 1980:23)と栗原は述べる。核被害に心を寄せるのは同じであっても、核問題とは何か、核被害とは何かで見えている光景が異なり、さらに核被害をめぐる優先順位の付け方が異なるのである。

バーバラ・レイノルズは次のように述べる。「私たちはすべてヒバクシャです。しかし私たちの多くは、核兵器や核実験あるいは、原爆工場・貯蔵所・核兵器や核エネルギー産業用利用などによる放射能の大量被ばくを蒙っている人びとでさえそうなのですが、自分自身のことしか考えないのです。……人びとは核エネルギーや核実験に反対するために団結します。人びとは賠償を要求します。彼らの努力は彼ら自身と家族の利益のためについやされますが、その視野は限られています。彼らは全人類について関心を持ちません。彼らは核エネルギーの開発と核戦争準備とを関係づけようとはしません。彼らは自分たち自身の利益のために語りますが、苦しんで理解と援助を求めているすべてのヒバクシャ——朝鮮人、ミクロネシア人、日系アメリカ人、被ばく兵士、原子炉事故による被災市民など——と連携しようとはしません」(長崎証言の会 1980:16)。

ある核被害者に光を当てるとき、それは広

島・長崎であろうとも、あるいは核実験や原発であろうとも、自らの関心を寄せるところで生じる核被害のみ主張して、他には目を閉ざしてはいないのだろうか。自らの問題、あるいは自らが引き寄せた問題の視野の外にある核被害や核問題を発見し続ける必要性を、バーバラ・レイノルズは教えてくれる。そのことが「われらみなヒバクシャ」になっていく道でもあろう。

おわりに「わたしも、またヒバクシャです」

“I, too, am a Hibakusha” 広島の平和公園の一角に建てられた、バーバラ・レイノルズの記念碑に刻まれた言葉である。日本語では「私もまた被爆者です」と翻訳され碑文に刻まれている。しかし、本稿で見てきたようにバーバラ・レイノルズも重要な役割を果たした被爆者問題国際シンポの成果を踏まえるならば、「私もまたヒバクシャです」と訳す方が適切ではないだろうか。「バーバラさんは、広島に落とされた爆弾の直接の被爆者ではなかったが、……被爆者の精神を身につけた典型的な『ヒバクシャ』といえる」(長崎証言の会 1980:20)と、詩人で英文学者でもあった大原三八雄(広島工業大学・当時)も述べている。

被爆者問題国際シンポで生み出されたヒバクシャとは、広島・長崎の原爆被害者が、Hibakusha として国際的な存在になっていった証である。シンポでは Hibakusha を国際用語としていくことが確認された。Hibakusha/ヒバクシャは、広島・長崎の原爆被害者の実態やその生きざまを、国際的に伝えていこうとする記号でもある。

そのヒバクシャとは単なる被害者としてのみ定義できるものではない。核被害を背負いながらも、生きて、立ち上がり、繰り返さない証を求め、語り、生き抜いてきた被爆者の姿が、ヒバクシャの言葉には刻まれている。

被爆者問題国際シンポで生み出されたヒバクシャとは、また、広島・長崎の原爆を体験した人だけを指す言葉ではない。被爆者を超越の意味が、ヒバクシャにはある。「われらみなヒバクシャ」あるいは「私たちはすべてヒバクシャ」と同シンポではうたわれた。すなわち全人類がヒバクシャなのである。

それは地球規模の放射能汚染の広がりを自覚して生み出されてきた言葉であるが、放射線被曝をしているか否かのみで、ヒバクシャは定義できるものではない。「われらみなヒバクシャ」あるいは「私たちはすべてヒバクシャ」とは、広島・長崎の被爆者と非体験者である自分を結び、そして私たち一人ひとりを相互に結び、核時代に批判的に向き合う土俵をきずくものでもある。

被爆者になることはできない。もちろん体験したものにはかわからないことはある。しかし被爆者に近づくことはできる。被爆者問題を被爆者の問題としてではなく、自分たちの問題として引き付けていった先に、「われらはみなヒバクシャ」の言葉は生み出されたのである。ヒバクシャとは自らなっていくものなのであり、同国際シンポの参加者は、まさにヒバクシャに

なっていくのである。

全人類がヒバクシャであり、皆がヒバクシャになっていくことを同国際シンポは説いたが、それは世界の核被害者を照らす言葉ではなかった。また原発の被害者を見据えたものでもなかった。ヒバクシャが、世界の核被害者、あるいは原発の被害者を照らす言葉になっていくのは、同シンポのその後を追う必要があり、本稿では扱えなかった。

ヒバクシャの言葉が社会に登場する重要な起点となった被爆者問題国際シンポに絞り本稿は論じ、同シンポの意義を改めて想起するとともに、ヒバクシャの言葉の源流に迫ってきた。しかし同シンポ以外にも、ヒバクシャの言葉の源流はある。その点は今後の研究課題としたい。

謝辞

被爆者問題国際シンポの日本準備委員会の事務局長を務められていた川崎昭一郎氏と長崎の故鎌田信子氏に、同シンポ当時の貴重な資料を提供いただき、当時の話も伺うことが出来ました。そうした資料やお話のおかげで本稿は完成することができました。お二人の快いご協力に厚く感謝申し上げます。

参考文献

- ISDA JNPC 編集出版委員会, 1978, 『被爆の実相と被爆者の実情——1977NGO被爆問題シンポジウム報告書』朝日イブニングニュース。
- 伊東壮, 1977a, 「市民権を得たヒバクシャ 国際シンポジウムから」『毎日新聞』1977.8.9夕刊。
- , 1977b, 「ヒバクシャの声を全世界へ」『文化評論』1977.10: 56-57。
- 今堀誠二, 1977, 「広島・長崎を原点に連帯の輪を広げよう 人類はすべてヒバクシャ」『読売新聞』1977.8.9 夕刊。
- 宇吹暁, 2014, 『ヒロシマ戦後史——被爆体験はど

う受けとめられてきたか』岩波書店。

- 原水爆禁止日本国民会議 21世紀の原水禁運動を考える会, 2002, 『開かれた「パンドラの箱」と核廃絶へのたたかい』七つ森書館。
- 猿橋勝子, 浅見善吉, 1977, 「対談 核兵器全面禁止と科学者の責任」『文化評論』1977.10:34-48。
- 東京都原爆被害者団体協議会, 1998, 『首都の被爆者運動史——東友会40年のあゆみ』東友会, 1998。
- 長崎証言の会編集部, 1980, 「特集 人類みなヒバクシャとは何か」『季刊・長崎の証言』7:14-34。
- 日本原水爆被害者団体協議会・日本被団協史編集

- 委員会, 2009, 『ふたたび被爆者をつくるな (本巻)』 あけび書房。
- 浜谷正晴, 1977, 「被爆者援護の思想と課題——被爆問題国際シンポジウムの成果と今後」『季刊科学と思想』 26:317-326。
- , 1978, 「被爆者問題研究の視座をめぐって——国際シンポジウム・その後」『季刊科学と思想』 28:150-162。
- 舟橋喜恵, 2006, 「広島は疲れている」『Hiroshima Reserch News』 広島平和研究所, 8(3):1
- 行宗一, 1977, 「被爆者問題に関心を持とう」『毎日新聞』 1977.8.1。
- Editorial Committee, Japan National Preparatory Committee for ISDA ed., 1978, *A Call from Hibakusha of Hiroshima and Nagasaki: Proceedings of the International Symposium on the Damage and After-Effects of the Atomic Bombing of Hiroshima and Nagasaki, July 21-August 9, 1977*, Tokyo: Asahi Evening News.
- 1 「被爆の実相とその後遺・被爆者の実情に関する国際シンポジウム」は、被爆者問題に国際的な光があたったシンポであったことから、本稿では「被爆者問題国際シンポ」と略して表記する。同シンポは、「NGO被爆問題国際シンポ」、「被爆問題国際シンポ」、「77国際シンポ」、「77シンポ」などとも略して呼ばれる。
 - 2 例えば、社会学分野では直野章子『原爆体験と戦後日本』（岩波書店、2015）が刊行された。「被爆者」という言説にも着目し、第2章で「『被爆者』の誕生と原爆被害の広がり」が設けられ、「被爆者運動と『原爆被害者』の主体化」が論じられているが、被爆者問題国際シンポのことは触れられてはいない。
 - 3 ヒバクシャというカタカナ表記は、1977年の被爆者問題国際シンポの以前にも確かに用いら

れることはあった。しかし、それは極稀なケースであり、ヒバクシャというカナカナ表記は同シンポを経て世に広がり、社会にある一定定着していったと言えよう。

新聞の記事の中に「ヒバクシャ」の言葉が登場し始めるのはいつなのだろうか。記事検索サイトの「ヨミダス歴史館」で確認ができる読売新聞の記事では、同国際シンポのことを書いた1977年8月9日付夕刊の今堀誠二「広島・長崎を原点に連帯の輪を広げよう 人類はすべてヒバクシャ」が初出である。朝日新聞の記事では、記事検索サイトの「聞蔵Ⅱビジュアル」で確認ができるのは、同シンポの前には唯一、1971年1月5日付の「虚像のヒバクシャ」がある。同記事では「マスコミによって印象付けられた『ヒバクシャ』」と被爆者の伊東社が書いた文書を引用する形で、ヒバクシャの言葉が登場する。伊東は国際シンポのカギを握る人物の一人で、1977年8月9日付の毎日新聞夕刊に「市民権を得たヒバクシャ 国際シンポジウムから」と題し、国際シンポの議論を経てヒバクシャの言葉が市民権を得たと述べている。1971年の記事の次に「ヒバクシャ」という言葉が朝日新聞のなかで出てくるのは、同国際シンポを報じた1977年8月の記事である。

- 4 グローバルヒバクシャ論は、竹峰誠一郎『マーシャル諸島終わりになき核被害を生きる』（新泉社、2015年、24-28, 370-372頁）を参照されたい。
- 5 ヒバクシャというカタカナ表記に注目した論稿は、他にも竹峰誠一郎「ヒバクシャとは誰か」（『明星大学社会学研究紀要』 34号、2014年3月、15-37頁）がある。
- 6 被爆者という言葉に着目した論稿としては、直野章子『原爆体験と戦後日本』（岩波書店、2015）や竹峰誠一郎「『被爆者』という言葉がもつ政治性」（『立命館平和研究』 9号、2008年

3月、21-30頁)などがあげられよう。

7 シンポの宣言では原爆は「すべての生きものを殺した」と述べられているが、動植物や生態系への影響など、ヒト以外の生命体への影響は、報告書を見る限り、同国際シンポでは取り上げられなかったようである。

8 2016年1月12日、「原爆相談者の会」の事務

所にうかがい三村正弘代表にお聞きしたことがある。三村は被爆者問題国際シンポの広島準備委員会のメンバーであり、同国際シンポの実務を広島で担い、ケースワーカーとして被爆者調査に参加した。

(たけみね せいいちろう、本学科常勤准教授)